

県道久留米立花線 道路改良工事事業地内 埋蔵文化財発掘調査報告書

福岡県八女市豊福所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第97集

2013

八女市教育委員会

県道久留米立花線
道路改良工事事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

福岡県八女市豊福所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第97集

2013

八女市教育委員会

序

八女市の西北部に位置する豊福地区には古墳時代を中心とした遺跡が数多く存在していると考えられ、果樹園や畑地を観察すると土器や石器などの破片が地表に姿を現しており、地下に包蔵されている遺跡の多さを物語っています。

両地区の北辺には筑後川の支流である広川が西流しており、これより西方の田畑を現在も潤し続けています。古代から永々と続く人々の営みは、皆この筑後川や矢部川の恵みを享受する事が出来た結果である事を実感します。

遺跡が数多く埋蔵されている事は予測されていたものの、実際の発掘調査が実施されるのは昭和後半の時代に入って以後の事になります。昭和45年3月に釘崎3号古墳（以後消滅）の土取り作業に伴う古墳出土遺物の採集・調査が行われた事を皮切りに、平成5年度から17年度までの間に行われた釘崎2号古墳や鶴見山古墳における学術的発掘調査が行われ、特に平成17年度の鶴見山古墳の調査においては古代の大豪族「筑紫君一族」の象徴とも言える武装石人（平成22年6月 国指定重要文化財に指定）が見つかり、当地にはまだまだ我々の知らない多種多様な歴史が眠っている事がわかりました。

今回の報告は平成21年度から同22年度までに行われた発掘調査の内容を広く公開する事で地下に埋没している遺跡に対する深いご理解を頂く事を目的としております。

本報告書が当該遺跡のみならず、市内に点在する文化遺産を深く理解する一助となり、より文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであるならば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡群の発掘調査に格段のご理解を頂きました事業者である八女県土整備事務所をはじめとする関係各位、及び、地元地域の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市豊福における県道久留米立花線道路改良工事事業地内において実施した埋蔵文化財発掘調査を記録した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。発掘調査、及び、確認調査は平成21年度から平成23年度まで行い、整理作業及び報告書作成については平成24年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構の名称・番号は、その種類毎に記号を付し、井戸状遺構をSEとし、溝状遺構をSD、土壌をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと表記した。
- 4 本書に使用した現地測量図については調査担当者を中心として参加者で分担して行った。なお、測量にかかる基準については任意の基準を設定し測量を行った後、国土地理院設定の世界測地系を当てはめている。
各測量図の浄書及び出土遺物の実測図作成・浄書については岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した現地写真及び出土遺物については、岩戸山歴史資料館において大塚が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 7 本書の執筆・編集は大塚が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

第1章 調査の経過	1
A 調査に至る経過	1
B 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第3章 調査の内容	7
発掘調査の概要	7
A 平成21年度の調査	8
1) 遺構と出土遺物	9
B 平成22年度の調査	13
1) 遺構と出土遺物	14
第4章 まとめ	19

挿 図 目 次

第 1 図	八女東部第 2 地区ほ場整備事業地周辺の遺跡分布図〔1/25,000〕
第 2 図	八女東部第 2 地区ほ場整備事業地内遺跡位置図〔1/6,000〕
第 3 図	平成 2 1 年度 A 地区 SK－0 1 実測図〔1/40〕
第 4 図	平成 2 1 年度 A 地区 SX－0 1 実測図〔1/40〕
第 5 図	平成 2 1 年度 A 地区 遺構配置図〔1/200〕
第 6 図	平成 2 1 年度 B 地区 遺構配置図〔1/200〕
第 7 図	平成 2 1 年度 B 地区 SD－0 1 土層断面図〔1/40〕
第 8 図	西ノ前遺跡 1 地点 SE－0 1～0 3 平面実測図〔1/40〕
第 9 図	西ノ前遺跡 遺構配置図〔1/200〕
第 10 図	西ノ前遺跡 1 地点 SE－0 1・0 2 実測図〔1/40〕
第 11 図	西ノ前遺跡 1 地点 SE－0 1 西側土層断面図〔1/40〕
第 12 図	西ノ前遺跡 1 地点 SE－0 2 土層断面図〔1/40〕
第 13 図	下町口遺跡 SB－0 1 実測図〔1/40〕
第 14 図	下町口遺跡 遺構配置図〔1/200〕
第 15 図	鶴見山遺跡 1・2 地点 遺構配置図〔1/200〕
第 16 図	B 地区、西ノ前遺跡 出土遺物 実測図〔1/3〕
第 17 図	下町口、鶴見山遺跡 出土遺物 実測図〔1/3〕

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表
-------	---------

図 版 目 次

PL 1～PL 3	県道久留米立花線道路改良工事事業地内 遺構写真
PL 4～PL 5	県道久留米立花線道路改良工事事業地内 遺物写真

第1章 調査の経過

A 調査に至る経過

旧八女市の中央部北側に位置している豊福地区周辺は、本格的な発掘調査に着手される以前より表面採取される弥生時代の遺物、散見される古墳の立地から、八女市内においては稀な埋蔵文化財密集地である。

しかしながら、本地区における本格的な発掘調査は平成5年度に実施した釘崎2号古墳の調査まで待たねばならなかった。

今回の発掘調査は当該地区における県道拡幅工事事業に伴うものであるが、事業者との折衝を重ねた結果、掘削が埋蔵物に及ぶ部分についてのみ発掘調査を行い、これ以外については現状保存の策が採られた。

B 調査体制

【平成21年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生	〔事業主体〕 福岡県八女県土整備事務所
教育部長	飯田 せつ子 (H22.2 ~ H24.3)	
文化課長	井上 富雄 (H22.2 ~ H25.3)	所 長 檜原 精治
同 係長	赤崎 敏男	副所長 (事務) 成清 勝己
同 主任	中川 寿賀子	副所長 (技術) 山田 義嗣
同 係員	大塚 恵治	道路課長 野上 嘉久
同 係員	永田 寧 (H22.2 ~)	県道建設係長 長友 和也
同 係員	樋口 真弓 (H22.2 ~)	担 当 下津浦陽一

【平成22年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生	〔事業主体〕 福岡県八女県土整備事務所
教育部長	飯田 せつ子	
文化課長	井上 富雄	所 長 廣松 誠
同 係長	中川 寿賀子	副所長 (事務) 松尾 成男
同 係員	大塚 恵治 (整理担当)	副所長 (技術) 村田 泰英
同 係員	永田 寧	道路課長 野上 嘉久
同 係員	樋口 真弓	県道建設係長 長友 和也
		担 当 秋吉 豊

【平成23年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

〔事業主体〕 福岡県八女県土整備事務所

教育長	西島 民生	所 長	平島 孝幸
教育部長	飯田 せつ子	副所長（事務）	松尾 成男
文化課長	井上 富雄	副所長（技術）	村田 泰英
同 係長	大塚 恵治（整理担当）	道路課長	原田 昌宏
同 係員	永田 寧	県道建設係長	土井 隆
同 係員	渡部 真弓	担 当	秋吉 豊

【平成24年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

〔事業主体〕 福岡県八女県土整備事務所

教育長	西島 民生	所 長	平島 孝幸
教育部長	井上 俊博	副所長（事務）	坂井 護
文化課長	井上 富雄	副所長（技術）	仁木 将之
同 係長	大塚 恵治（整理担当）	道路課長	原田 昌宏
同 係員	永田 寧	県道建設係長	土井 隆
同 係員	渡部 真弓	担 当	橋爪 博紀

なお、発掘調査にあたり、近隣に居住される住民の皆様、そして豊福地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。紙面ではありますが、記して感謝申し上げます。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647㎢を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

豊福遺跡群は福岡県八女市豊福に所在している。

当該地周辺は以前より古墳時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られていた。平成15年度～17年度に行われた鶴見山古墳の調査により、これまであまり知られていなかった「磐井の乱」後における筑紫君の動向についても、その在り方が少しずつ解明できるようになってきた。

また、南北朝時代に交通の要衝であった当地は、北朝側と南朝側が激しく支配権を争う場となった事もあり、歴史の深さは目を見張るものがある。

以下、主に八女市西部地区における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

（概要）

八女市西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。同後期に入ると、アモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

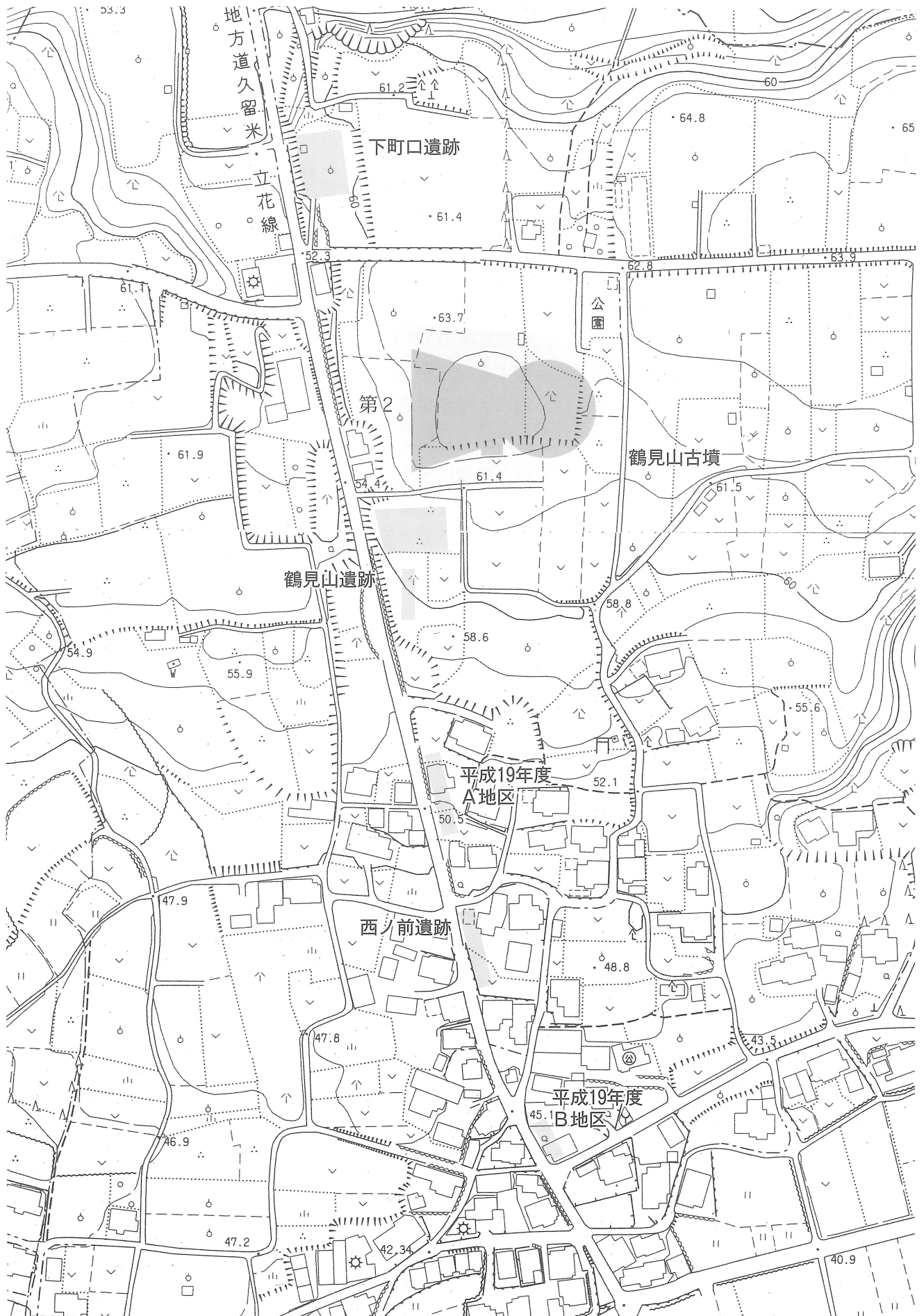
弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴式



1/25,000

- | | | | | |
|-----------|--------------|--------------|------------|----------|
| 1. B地区 | 2. 西ノ前遺跡 | 3. 下町口遺跡 | 4. 鶴見山遺跡 | |
| 5. 鶴見山古墳 | 6. 岩戸山古墳 | 7. 乗場古墳 | 8. 辻ノ西遺跡 | 9. 善蔵塚古墳 |
| 10. 丸山塚古墳 | 11. 茶臼塚古墳 | 12. 釘崎2号古墳 | 13. 釘崎1号古墳 | 14. 丸山古墳 |
| 15. 西原遺跡 | 16. 口ノ坪遺跡 | 17. 平田・六反田遺跡 | 18. 万上田遺跡 | 19. 赤氏遺跡 |
| 20. 熊野遺跡 | 21. 津江・八升町遺跡 | | | |

第1図 事業地周辺の遺跡分布図 [1/25,000]



第2図 各遺跡位置図 [1/5,000]

住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群中から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。

これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

第3章 調査の内容

発掘調査の概要

平成21年度から始まった県道久留米立花線道路拡張工事事業地内における発掘調査は、現道の拡幅工事が事業原因であったため、交通等に対する支障が発生しないよう細心の注意が必要であり調査は困難を極めると思われた。事業者である八女県土整備事務所とは事業の計画が八女市に伝えられた頃から協議を進めており、その協議の中において「事業地の多くが周知の埋蔵文化財包蔵地に存在する事から、発掘調査が行われる期間を勘案し、随時確認調査及び踏査等を実施しながら埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性のある掘削作業を伴う部分において埋蔵文化財が確認された場合、発掘調査を実施して頂く。」旨の回答をいただいた。

これを受け、発掘調査の実施については確認調査や踏査を随時行いながら進めていき、21年度の発掘調査事業終了までこれを継続した。

平成21年度の発掘調査は事業地中央部分にあたるA地区、南端部分付近のB地区の調査を行い、弥生時代後期～平安時代までの包含層を検出。多くの遺物が出土した。

平成22年度は西ノ前遺跡を皮切りに、下町口遺跡、鶴見山遺跡の調査を行い、弥生時代後期～鎌倉時代に該当する遺構・遺物が出土した。

平成23年度は21年度に行ったB地区の北側隣接地の確認調査を行ったが、2m以上の深度に包含層の存在が予測されたが、事業内容を勘案し遺構が保護出来る状況である事が担保されたため、本調査については実施していない。

発掘調査の全行程終了後、平成24年度中に出土遺物等の整理作業を終了させ本報告に至る事となった。以下においては、各調査の結果について報告を行う。

〔平成 2 1 年度の調査〕

平成21年度調査

平成21年度は事業地の南側を中心とした地域を対象として調査を行った。現道路の拡幅部分のみの調査であるため調査面積は非常に限られているが、総延長43m分の調査を行う事が出来た。

以下、調査に係る部分について言及し、全体像については後述する。

1) A地区調査における遺構と出土遺物 (期間：平成22年2月8日～平成22年2月17日)

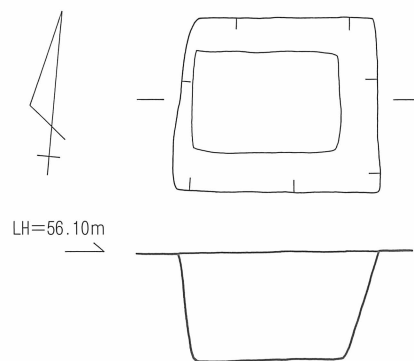
A地区は鶴見山古墳から160m南にあり、総延長約23m、幅6mをその調査対象区とした。

確認調査の段階から、あまり明確でない土色を成す軟弱な土質が部分的に存在する事を確認していたが、表土を除去したところ、それらの大半は後世の攪乱である事が判明した。しかしながら、それら攪乱の間にはいくつかの遺構が散見されたため、本調査に移行した。

検出した遺構は土壇(SK)2基、ピット(SP)2基、不明遺構(SX)3基を確認した。

SK-01 (土壇) <第3図>

調査区内で唯一明瞭な土壇と呼べる掘削跡であるが、出土遺物等はなく性格等についてはまったく言及出来ない。長軸方位をほぼ東西に取り、平面プランは長方形を呈す。規模は0.55m×0.46m、深さ0.6mを測る。形状から近世墓の可能性が考えられるが、明確な根拠が乏しい。



第3図

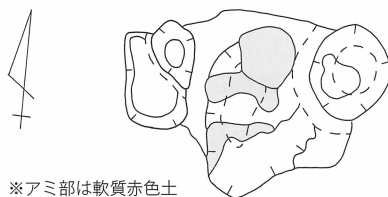
平成21年度

A地区 SK-01実測図

[S=1/40]

SX-01 (不明遺構) <第4図>

調査区内の中央付近で検出した被熱硬化面を伴う遺構。隅丸長方形の平面プランを呈しており、規模は1.1m×1.0m、深さ8cmを測る。底面は南北方向に細長い形状を成しており、その両端部に被熱した硬化面や軟質の赤色土が乗る。遺構西端部と南端部には黒色硬化面があり、比較的高い熱作用があったものと推測される。しかしながら、熱作用を必要とする出土遺物が確認されていない現段階では、本構造の性格について直接言及出来ない。

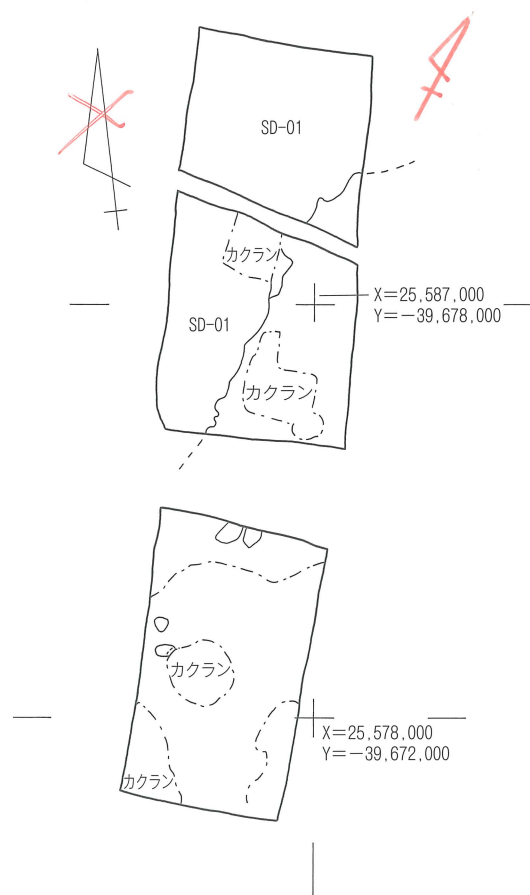


※アミ部は軟質赤色土

第4図 平成21年度 A地区 SX-01実測図 [S=1/40]



第5図 平成21年度 A地区
遺構配置図 [S = 1 / 200]



第6図 平成21年度 B地区
遺構配置図 [S = 1 / 200]

1) B地区調査における遺構と出土遺物 (期間:平成22年2月17日~平成22年3月11日)

B地区はA地区から180m南にあり、総延長約20m、幅5mをその調査対象区とした。

確認調査の段階では明確な遺構は見られなかったが、排土中に歴史時代に属する土師器片が複数存在する事を確認していたため表土を除去し本調査を開始した。表土下には後世の盛土(整地跡。時期不明)が広がっており、それを現代の攪乱が多数切り込んでいる事が判明した。排土中に含まれていた遺物は、これら攪乱が巻き上げた結果である可能性が高まったため、整地部分についても重機で掘削し除去を行った。整地土の下部には予測通り黒色土層が広がっていたが、当初は遺構の性格が掴めないでいた。黒色土については人力で掘削を行い、遺構の検出、及び、遺物の採取に意識を集中した。調査の過程において、本遺構が谷状の自然地形が埋没した産物である事が徐々に明らかになり、調査は地形最深部と谷状地形の方向性を確認する事に主眼をおく事とした。

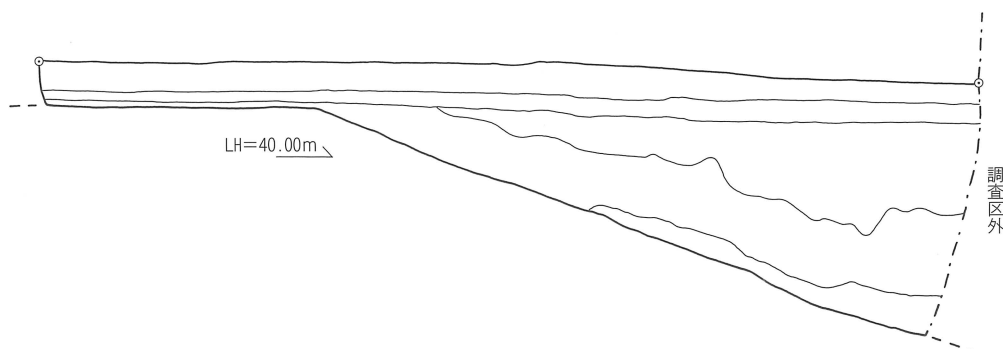
なお、検出した遺構は谷状遺構ではあったが検出時の平面形状が溝状であったため、付与した遺構識別名称としてSD(溝状遺構)を使用する事とした。

SD－01 〈第7図〉

B地区において検出した唯一の遺構で、平面形状は溝状に見えるが、基本的に北北東～南南西方向に向きをとる谷状地形が埋没した痕跡である。調査区内において検出した部分は全体形からすると僅かであり、地形の詳細については判然としない。規模（検出分のみ）は南北長 10.6m、東西長 4.8m（最大検出幅）、深さ 1.1m を測る。傾斜角度は地平面に対し約 20 度となり、ゆったりとした緩斜面を成している。しかしながら、傾斜面は自然地形らしからぬ直線的な面を成しており、人工的に手を加えられたかのような感がある。平面形においても遺構縁辺部がやや直線的に延びており、今後当該地区の調査が行われる折の注意事項とせねばなるまい。

埋土中からは弥生土器片、土師器片、瓦器片、青磁・白磁片のほか、胴部の長い器台形のミニチュア土器等が出土した。出土する遺物の時期幅が非常に広く、中心となる時期の特定がやや困難ではあるが、少なくとも 13 世紀頃までは埋没する事なく存在していたものと思われる。

本調査においては地形最深部に到達しなかったため、埋没の初期段階の様相が分からず、人工的な手が加えられたか否かも含め、谷状地形の利用方法や埋没の契機になった事象等について明確には出来なかった。



第7図 平成21年度 B地区 SD－01（谷状遺構）
土層断面図〔S＝1／40〕

〔平成 2 2 年度の調査〕

平成22年度調査

平成22年度は事業地の中央～北側部分を中心とした地域を対象として調査を行った。平成21年度調査と同様、現道路の拡幅部分のみの調査であるため調査面積は非常に限られているが、総延長109m分の調査を行う事が出来た。

以下、調査に係る部分について言及し、全体像については後述する。

1) 西ノ前遺跡における遺構と出土遺物 (期間：平成22年6月3日～平成22年7月7日)

西ノ前遺跡は平成21年度調査地であるA・B地区の間にあり、B地区から北へ50m～100m程の距離をとる。ランドマークとなる鶴見山古墳からは南へ260mに位置している。

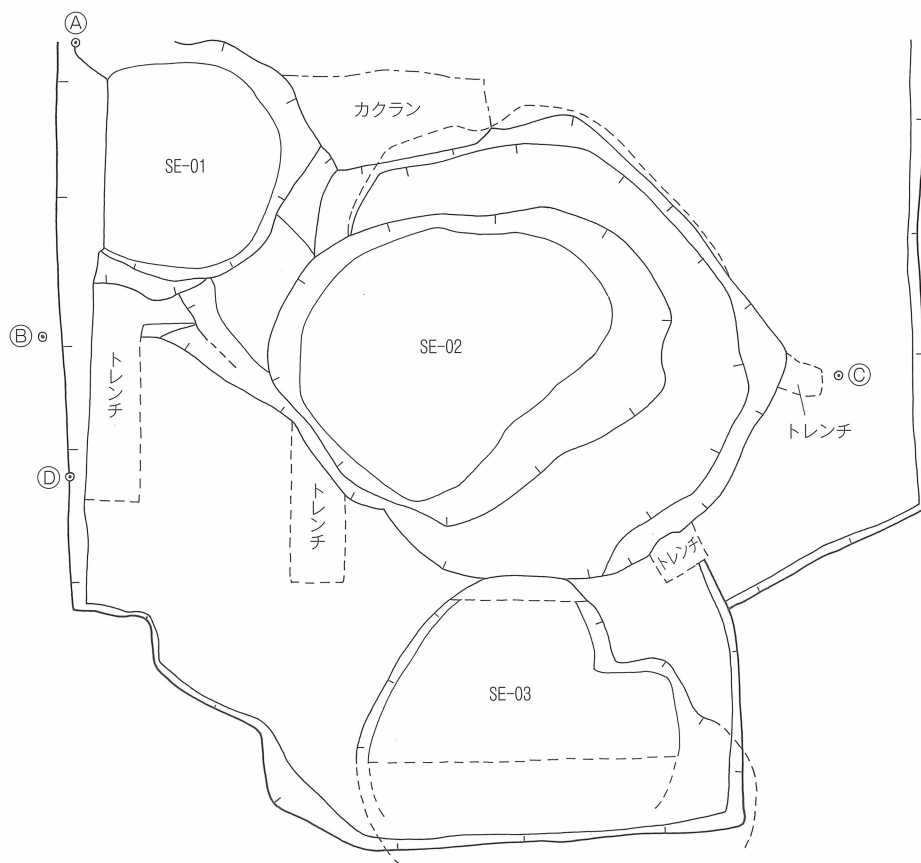
本調査地は現在居住されている家屋敷地に直接繋がっている事から、掘削調査は便宜上1～3地点に大別し進める事とした。検出した遺構は井戸状(SE)3基、埋甕1基であった。

西ノ前遺跡 1地点

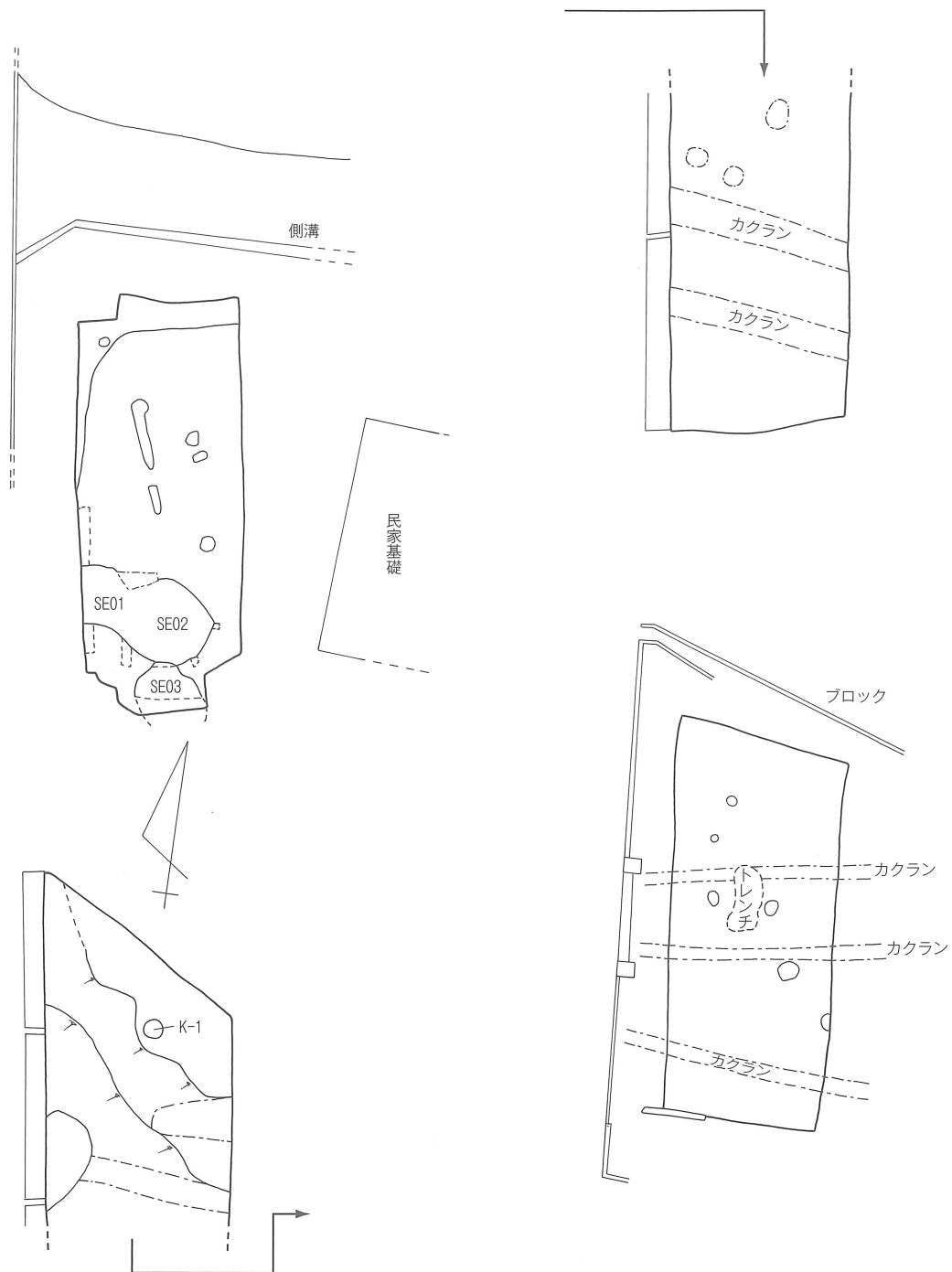
SE-01 <第8・10図>

本遺構は1地点の南端付近において検出した井戸状の遺構である。一部をSE-02・03を切っている。掘り方は円形を成している。規模は直径1.4m、深さ1.33mを測る。

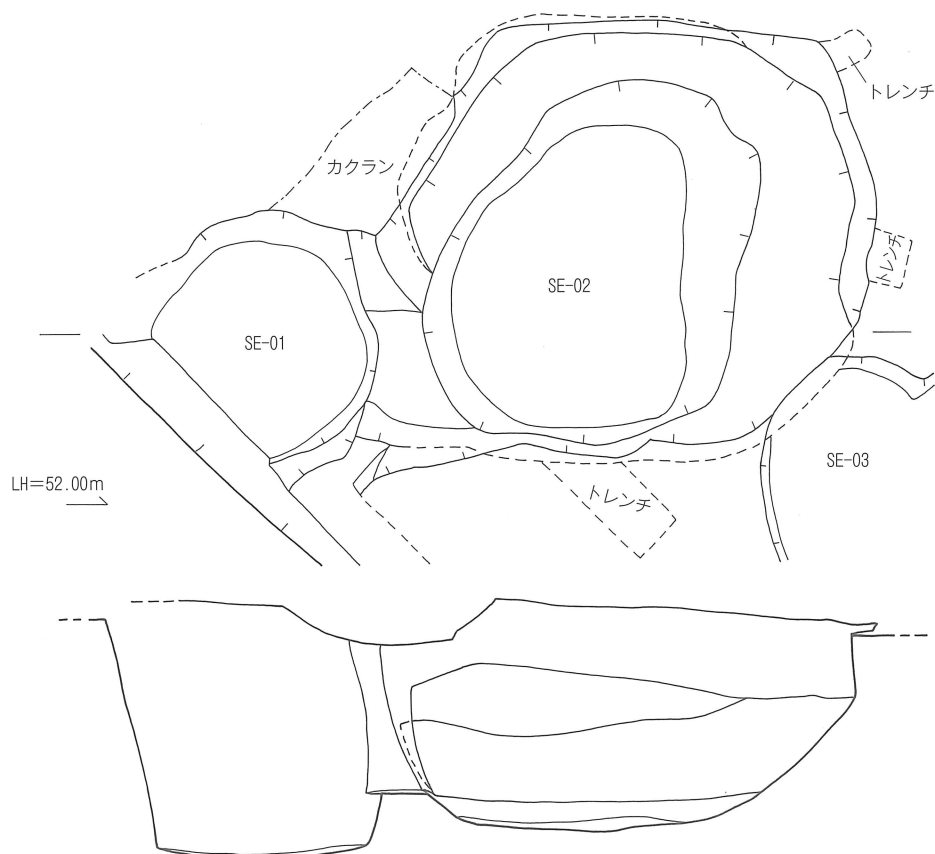
遺構内の堆積状況を見ると、SE-02と同様南西方向から流入土が入って来ている事がわかる。しかしながら、層を境として上部と下部の堆積状況が大きく異なっているところから、1度掘り直しを行った後2度目の使用があり、その後SE-02と同様の埋没が起こったものと思われる。



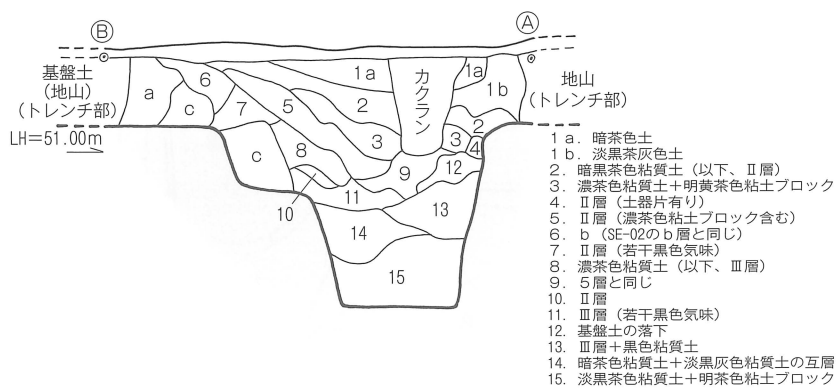
第8図 西ノ前遺跡 1地点 SE-01～03 平面実測図
[1/40]



第9図 西ノ前遺跡 遺構配置図 [S = 1 / 200]



第10図 西ノ前遺跡 1地点 SE-01・02 実測図
〔1/40〕



第11図 西ノ前遺跡 1地点 SE-01 西壁土層断面図
〔1/40〕

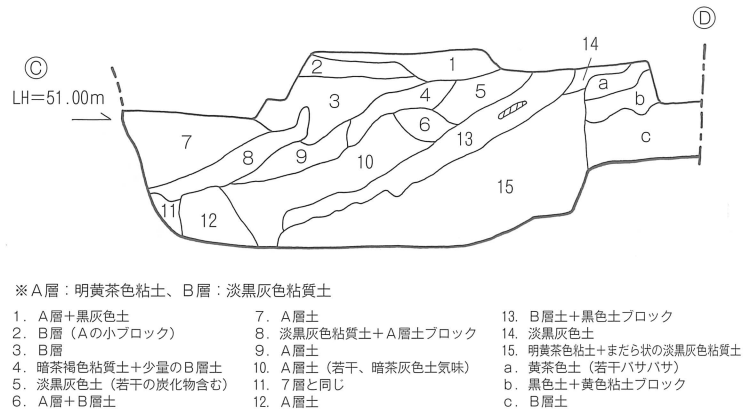
SE-02 〈第8・10図〉

本遺構は1地点の南端付近において検出した井戸状の遺構である。一部をSE-01・03によって切られている。掘り方を隅丸方形とし、南西端部に通路状の平坦面を有している。土壌底面の中央部やや南寄りには1.9m×1.6mの一段下る卵形状の窪みがある。長軸方位をN°-Wに取り、規模は長軸長2.8m以上、短軸長2.3m、深さ1.2mを測る。

断面形を見ると、壁面はほぼ垂直か、若干オーバーハング状態となっている事が分かる。これは水の滞留が引き起こした結果であると思われるが、通常の井戸跡の場合、最下部に沈殿物が溜まりレンズ状堆積を成す事が多いが、本遺構ではそれが見られない。また、遺構内の堆積状況を見ると、大きく3時期に分

けて南西方向から流入土が入って来ている事がわかる。しかしながら各時期の流入土に土質・土色の変化が少ないことから、非常に短期間のうちに埋没したものと考えられ、自然流入のみではなく意図的な埋没も視野に入れる必要がある。

出土遺物として、弥生土器の破片があるが本遺構の時期を示すものではないと思われる。遺構検出面付近において瓦器片や石鍋破片（いずれも細片）が見つかったことから、最終埋没時期は13世紀前後であると思われる。



第12図 西ノ前遺跡 1地点 SE-02 土層断面図
〔1/40〕

SE-03 〈第8図〉

本遺構は1地点の南端付近において検出した井戸状の遺構である。SE-02の一部分を切っている。掘り方は不整円形を成すものと思われ、規模は直径1.8m前後、深さ1.0mを測る。

断面形を見ると、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、堆積状況はSE-02に似た状況を呈している。出土遺物はなかった。

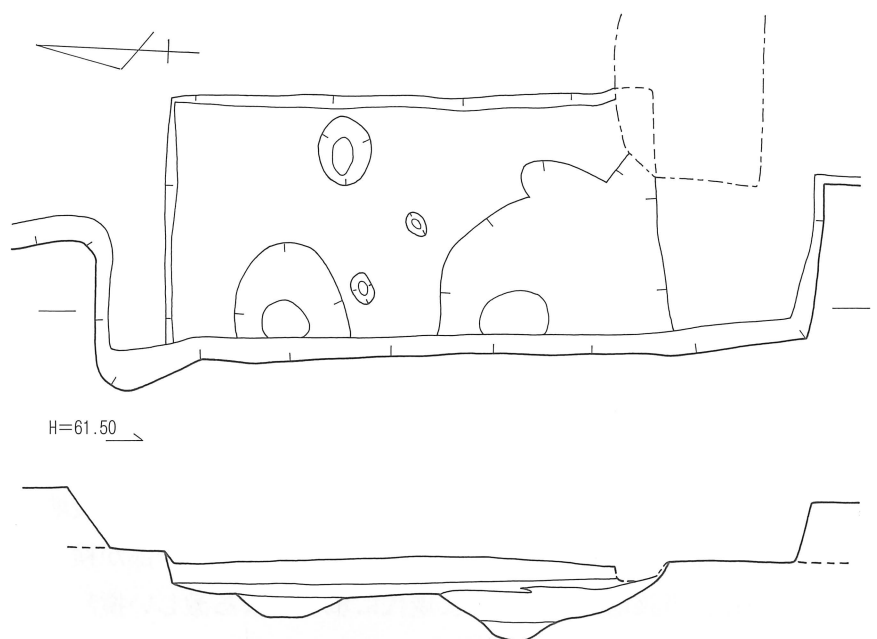
2) 下町口遺跡における遺構と出土遺物（期間：平成22年7月6日～平成22年9月2日）

下町口遺跡は平成21年度調査地であるA地区の北280mにある。ランドマークとなる鶴見山古墳からは北西へ160mに位置している。

検出した遺構は竪穴式住居（SB）1棟、不明遺構（SX）1基、ピット等であった。

SB-01 〈第13・14図〉

調査区の南西端において検出した竪穴式住居である。遺構本体の半分以上が調査区外に出ており詳細は不明であるが、検出規模は長辺2.7m、短辺1.3m以上、深さ0.12mを測る。主柱穴と思われる柱穴を2穴検出しているが、柱穴掘り方が非常に接近しており、



第13図 下町口遺跡 SB-01 実測図〔1/40〕

柱穴間に地炉等の構造物を構築する事は非常に困難な状況となっている。4本柱の建物であれば設置は可能であるが、八女地区において横長長方形タイプの4本柱住居は非常に珍しく、やや特異な1例となる。

出土遺物は全て細片であったため、図化していない。

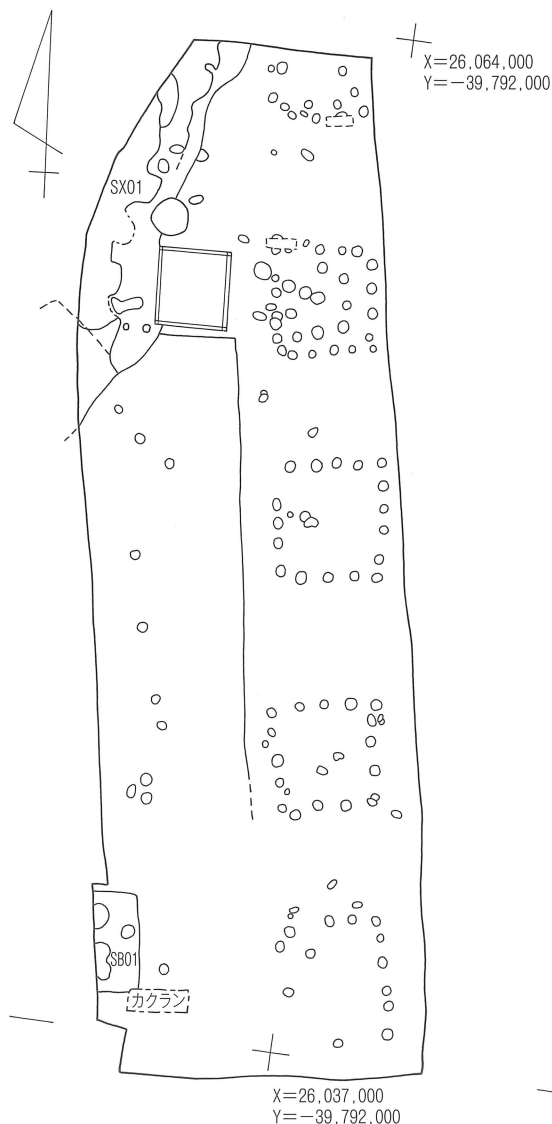
SX-01（不明遺構）〈第14図〉

調査区内の北西端において検出した溝状を呈する遺構である。南西～北東方向を示しているが、遺構全体の大半が調査区外にあるものと思われ、詳細は不明である。規模（検出分のみ）は検出長11.1m、幅1.2m～2.2mを測る。断面には数列の段、及び、凹凸があり、水流作用による流路の浸食のような特徴を示している。

出土遺物として、甕・壺の破片がある。

SP-02 〈第14図〉

調査区南側で検出したピット。直径20cm程の小さなものであったが、検出時、及び、掘削時に古墳時代前半頃の土師器等、多くの出土遺物が見られた。SB-01とは3.6mの間隔があるが、それ以外関連すべき遺構が見当たらないことから、时期的な接近があるものと考えたい。



第14図 下町口遺跡 遺構配置図
〔1/200〕

3) 鶴見山遺跡における遺構と出土遺物〈第15図〉

（期間：平成22年8月26日～平成22年12月16日）

鶴見山遺跡は、ランドマークとなる鶴見山古墳からは南隣接地に位置しており、前方部側周濠の南西コーナー外端部外側であったため、鶴見山古墳の周堤の一部が検出出来る可能性もあり、調査は慎重に始めた。しかし、当該地は後世、特に現代に重機による激しい攪乱に見舞われており、周堤はおろか、遺存する遺構は小ピットを除いてほぼ皆無、という状況であった。

調査は便宜上北側地区を1地点、南側地区を2地点とし実施した。2地点においては遺構状の痕跡を見

出す事が出来たが、埋土は締まりがなく不明瞭な色彩であっただけでなく、不整形なものが圧倒的に多く、いわゆる樹木等の生痕であると判断した。

1・2地点を通じて出土遺物がほとんどなく、1地点において縄文土器の細破片が僅かに確認出来ただけであった。1地点の北端には風倒木痕と思われる痕跡があり、それを取り巻くように小ピット群が展開している状況を含め、一時的ではあるが、往事近辺に生活域が存在していた事を示唆しているものと考えられる。

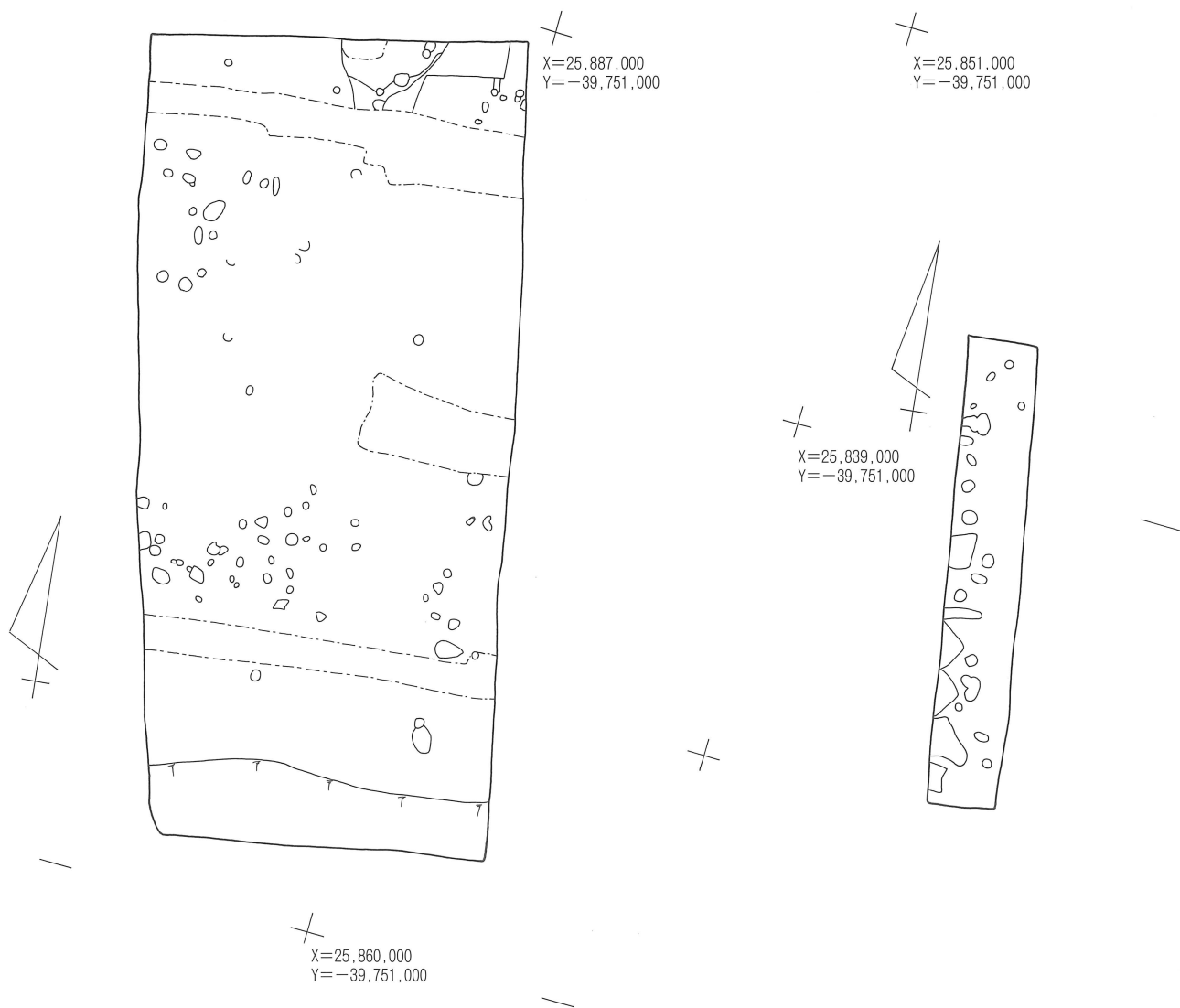
第4章 まとめ

平成22年2月から始まり、同年12月までのおよそ10ヶ月の間、県道久留米立花線道路改良工事に伴う発掘調査を行った結果、前述したような成果を得る事ができた。

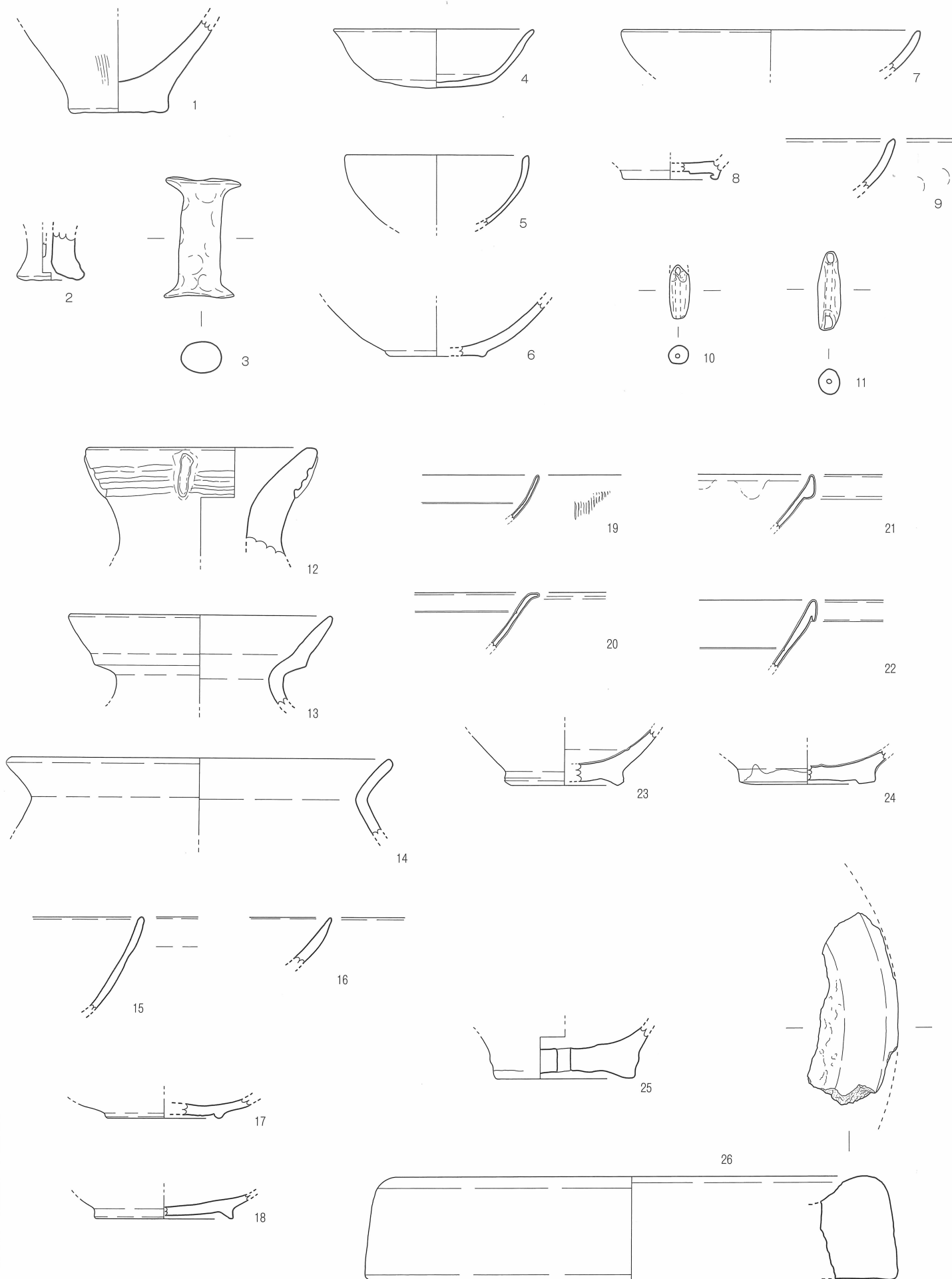
本格的な調査を行う前段階においては、隣接する鶴見山古墳との位置関係から古墳の外部施設の一端に関わる情報を得られるのではないかと予想していた。また、当該地は鎌倉時代、いわゆる南北朝時代において当時の交通の要衝であった現六田地区における「六田河原の戦い」が繰り広げられた地域であったため、歴史の表舞台から切り離された過去が土中に眠っているものと想像された。しかしながら、当該地は現道である久留米立花線が完成する前後、または、それ以前に大規模な開発・削平が行われており、予測された成果については検出する事が出来なかった。

このような状況であっても平成21年度のB地区や平成22年度の西ノ前遺跡における13世紀をその主たる時期とする遺構・遺物が検出された事は意義深いものであった。また、平成22年度の下町口遺跡において出土した関西方面の影響を受けた外来系土器の出土においては、当初予測すらしていなかった成果でもあり、当地における古代の歴史の奥深さを知る1つのきっかけとなった。

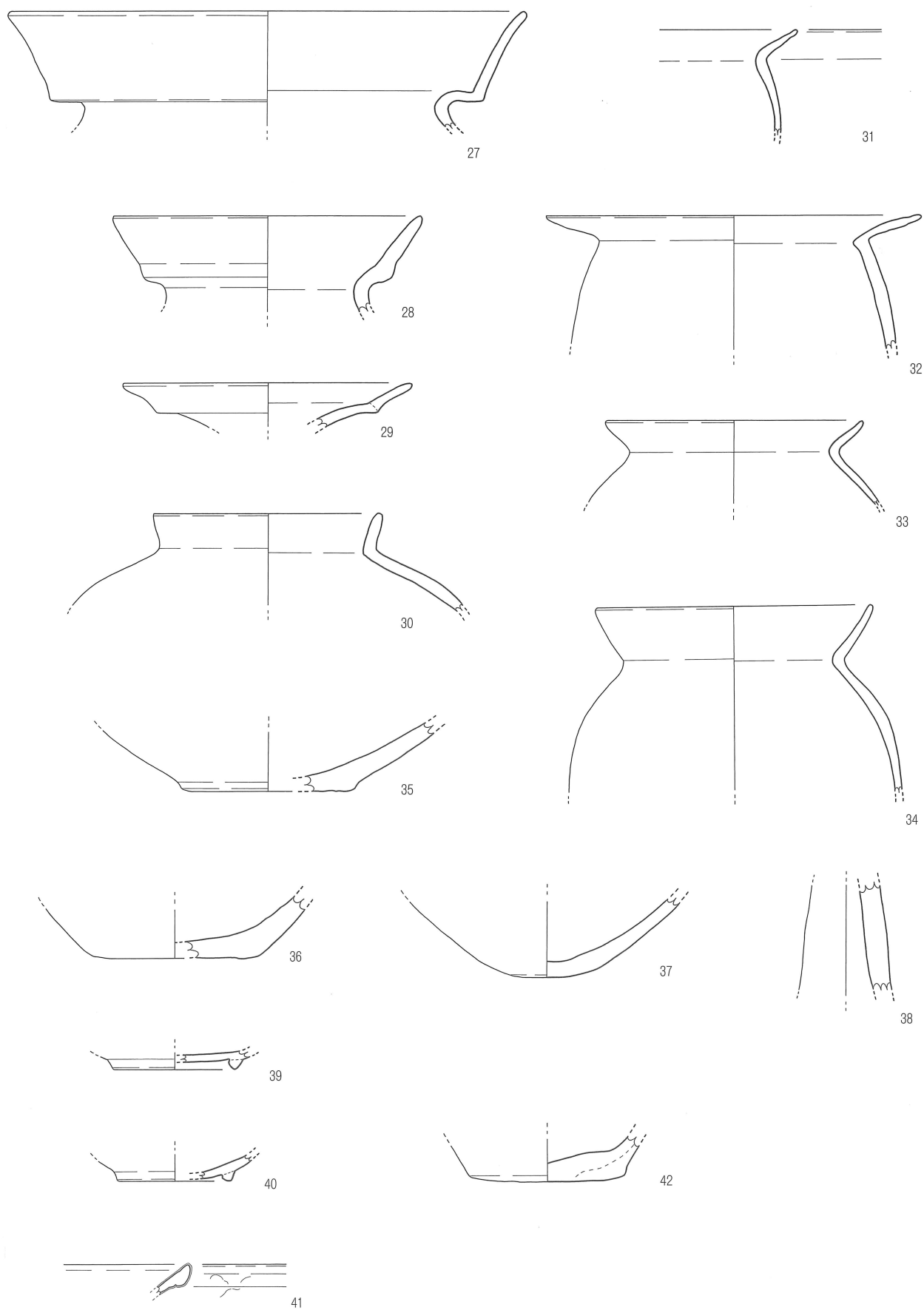
今回の調査は、現道路の拡幅部分のみの調査でもあり、非常に限定的なものであった為、知り得た情報が少なかった事も否めない。しかしながら、今後は周辺の開発等により調査事例が増すものと思われ、本調査の成果が今後の豊福地区における歴史解明の端緒になってくれるものと信じて止まない。



第15図 鶴見山遺跡 1・2地点 遺構配置図〔1/200〕



第16図 B地区、西ノ前遺跡 出土遺物 実測図 [S = 1 / 3]



第17図 下町口、鶴見山遺跡 出土遺物 実測図〔S = 1 / 3〕

第1表 出土遺物観察表

挿図	土器 番号	実測 番号	出土遺構	機 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調、胎土、焼成	備 考
	1	8	B地区 SD-01	甕底部		6		淡黄茶色、片岩・石英粒子多く含む、良好	
	2	6	〃	ミニチュア		4		淡茶褐色、片岩粒子含む、良好	
	3	9	〃	ミニチュア	4.4	4.2	7	淡黄褐色、片岩・石英・赤色粒子含む、良好	
	4	7	〃	土師器皿	11.8	7	3.5	淡黄褐色、赤色粒子含む、良好	胎土精緻
	5	2	〃	土師器碗	11			淡黄茶色、石英・赤色粒子含む、良好	白色気味
	6	3	〃	土師器碗		5.7		淡黄褐色、片岩微粒子含む、良好	
	7	1	〃	瓦器碗	18			暗灰色、胎土精緻、良好	
	8	4	〃	瓦器碗		5.6		淡灰色、胎土精緻、良好	
	9	5	〃	瓦器碗				淡灰色、胎土精緻、良好	
	10	11	〃	土錘	長 3.1	幅 1.2		淡黄褐色、片岩・赤色粒子含む、良好	
	11	10	〃	土錘	長 4.6	幅 1.35		淡黄褐色、片岩・赤色粒子含む、良好	
	12	1	西ノ前 SE-01	器台?	13.9			白灰色、胎土精緻、良好	上層出土、棒状浮文
	13	7	西ノ前 SE-03	二重口縁壺	15.8			黄茶色、片岩細砂粒含む、良好	
	14	6	西ノ前 SE-03	甕	23.1			暗黄茶色、片岩・角閃石含む、良好	
	15	4	西ノ前 K-1	瓦器碗				白灰色、胎土精緻、良好	
	16	3	西ノ前 K-1	瓦器碗				白灰色、胎土精緻、やや不良	
	17	5	西ノ前 SE-01	瓦器碗		6.9		白灰色、胎土精緻、良好	下層
	18	1	西ノ前 K-1	瓦器碗		8.2		白灰色、胎土精緻、やや不良	
	19	14	西ノ前 K-1	白磁碗				茶灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	20	13	西ノ前 K-1	白磁碗				灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	21	12	西ノ前 K-1	白磁碗				茶灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	22	11	西ノ前 K-1	白磁碗				灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	23	15	西ノ前 K-1	白磁碗		7.2		茶灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	24	10	西ノ前 K-1	白磁碗		8		灰色気味、黒色微粒子含む、良好	灰色気味透明釉
	25	8	西ノ前 SE-02	甕?		8.4		淡褐色、片岩・赤色粒子含む、不良	陶器片か
	26	9	西ノ前 SE-01	石臼			6.1	砂岩製	485g
	27	5	下町口 SP-02	二重口縁壺	27.8			淡黄茶色、片岩・石英・赤色粒子含む、やや不良	
	28	3	下町口 SX-01	二重口縁壺	16.6			黄茶色、片岩・赤色粒子含む、やや不良	
	29	7	下町口 SP-02	二重口縁壺	15.6			淡黄茶色、片岩・石英・赤色粒子含む、やや不良	
	30	4	下町口 SP-02	壺	12.4			淡黄茶色、片岩・石英・赤色粒子含む、やや不良	
	31	9	下町口 SP-02	甕				明黄茶色、片岩・赤色粒子含む、やや不良	
	32	8	下町口 SP-02	甕	22			白黄茶褐色、片岩・石英・赤色粒子含む、やや不良	
	33	6	下町口 SP-02	甕	13.9			白黄茶色、片岩・赤色粒子含む、やや不良	
	34	13	下町口 SP-02	甕	14.9			淡黄茶色、片岩・赤色粒子含む、やや不良	
	35	11	下町口 SP-02	壺底部		9.3		淡黄褐色、片岩・赤色粒子含む、やや不良	
	36	1	下町口 SX-01	甕底部?		8.6		白黄茶色、片岩粒子含む、やや不良	土器 A
	37	2	下町口 SX-01	甕底部		3.4		暗黄茶色、片岩・角閃石含む、やや不良	土器 A
	38	132	下町口 SP-02	高坏脚部				明黄茶褐色、赤色粒子含む、良好	
	39	15	下町口 SP-02	瓦器碗		6.7		白灰色、胎土精緻、良好	
	40	14	下町口 SP-02	瓦器碗		6.2		淡黄茶色、胎土精緻、やや不良	
	41	17	下町口 SP-02	白磁碗				白黄茶色気味、精緻、良好	
	42	1	鶴見山遺跡 E-1	甕底部		8.3		茶褐色、石英・片岩・角閃石含む、やや良	1地点

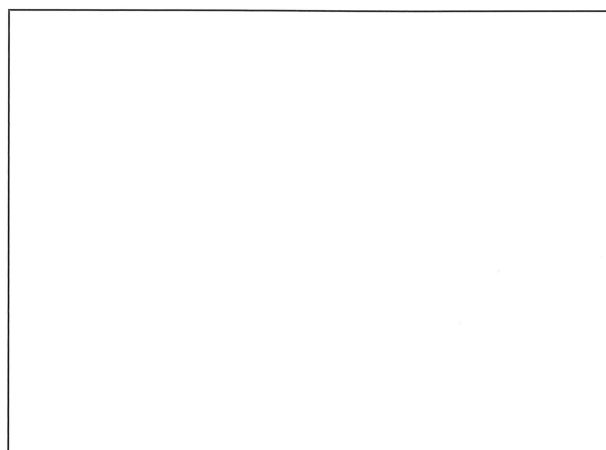
第1表 出土遺物観察表（石器）

挿図	石器 番号	実測 番号	出土遺構	種別	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	備 考
29	501	166	第1区1面	摺り石		7.6	9.8	4.9	550	
"	502	182	第2区第2層	摺り石		14.2	12.2	5.2	1,360	
"	503	184	第2区第1層	砥石	砂岩	8.2	6.7	3.7	415	
"	504	185	第2区第1層	石包丁未成品	片岩	5.6	9.3	0.6	52.3	
"	505	183	第2区第1層	石包丁	片岩	4.6	7.3	0.5	33.2	
"	506	77	第5区SD-05	凹み石		11.3	10.5	4.9	710	
"	507	78	第5区SD-05		凝灰岩	10.5	6.3	5.3	345	No. 5
"	508	83	第8区SD-03中層	球状石製品		7.1	6	5.7	262	祭具か？
"	509	84	第8区SD-03中層	球状石製品		4	3.6	2.7	48.3	祭具か？
"	510	29	早水町A区SB-02 P-1		チャート？	7.1	4.3	1.2	51.3	用途不明の1孔あり
"	511	32	早水町A区SX-02検出面	石鎌	片岩	11.4	3.6	0.5	31.7	完形品
"	512	30	早水町A区SX-02検出面	砥石	砂岩	9.2	2.9	2.9	130	
"	513	31	早水町A区SX-02下層	石包丁	輝緑凝灰岩	4.2	7.4	0.7	36.7	立岩型石包丁
"	514	33	早水町A区SX-02中層	砥石？	片岩	14	8.5	7.5	1,440	
"	515	259	栗ノ内A区包含層第2層	石包丁未成品	片岩	5.2	9.6	0.6	52.3	
"	516	260	栗ノ内A区包含層第2層	石包丁未成品	片岩	7	10.3	0.4	51.2	
"	517	262	栗ノ内A区包含層第2層	砥石	砂岩	12.8	8	2	285	
"	518	257	栗ノ内A区SK-05	石包丁	泥岩	4.6	6.7	0.7	35.8	白灰色で光沢あり
"	519	261	栗ノ内A区包含層第2層	摺り石？	砂岩	9.4	4.7	3.9	250	下部に赤色顔料付着、石杵？
"	520	264	栗ノ内A区包含層第1層	円盤形石製品	片岩	6.2	6.8	0.9	67.8	
"	521	263	栗ノ内A区包含層	石包丁	片岩	4.4	10	0.5	36.4	
"	522	1	高ノ町4地点	両刃小型石斧	蛇紋岩	8.3	4.2	1.1	75	

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号

PL 1



平成21年度 A地区 全景（南より）



A地区 SX-01 完掘状況（南東より）



A地区 SK-01 完掘状況（南西より）



A地区 SK-02周辺 完掘状況（南東より）



平成21年度 B地区 SD-01 掘削状況



B地区 SD-01 掘削状況（北東より）



B地区 SD-01 堆積土状況（北より）



B地区 SD-01 完掘状況（北より）



西ノ前遺跡 遺構掘削状況（東より）



西ノ前遺跡 SE 群 完掘状況（南東より）



SE-02 堆積土状況（北より）



埋甕掘削状況（北西より）



西ノ前遺跡 1・2 地点 作業状況（南より）



西ノ前遺跡 3 地点 完掘状況（北より）



下町口遺跡 調査前風景（南より）



下町口遺跡 完掘状況（南より）



下町口遺跡 SB-01 完掘状況（南東より）



SB-01 堆積土状況（東より）



下町口遺跡 SX-01 完掘状況（南より）



SX-01 完掘状況（北より）



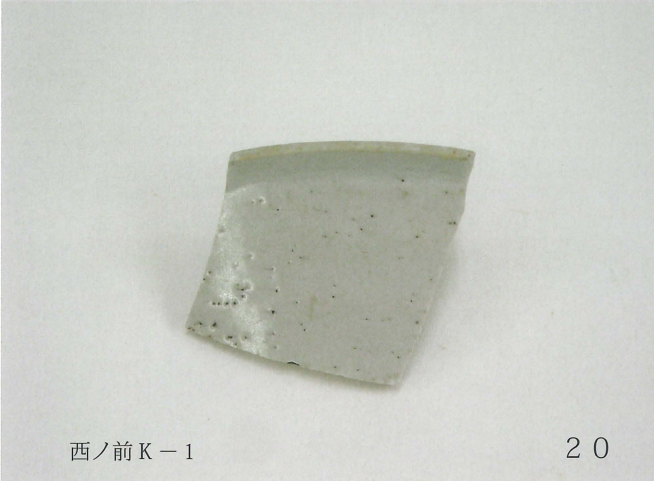
下町口遺跡の南端部 県道との三叉路に立つ
「寺坂吉右衛門墓」銘の石柱（西より）

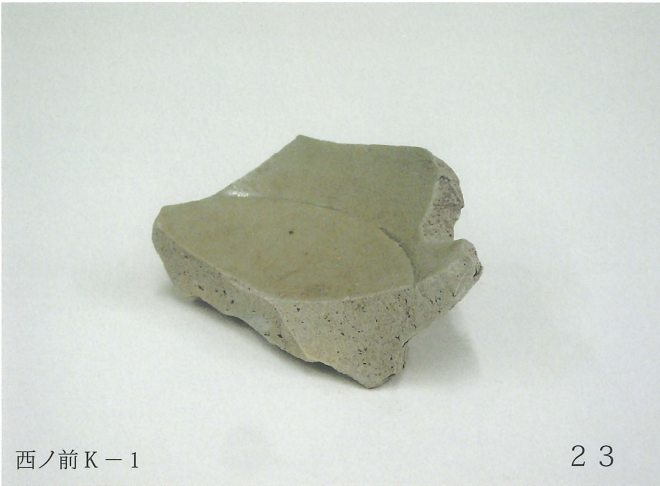


下町口遺跡 完掘状況（南より）



鶴見山遺跡 掘削作業状況（東より）





報 告 書 抄 録

ふりがな	けんどうくるめたちばなせんだうろかいりょうこうじぎょうちないまいぞうぶんかざいはつくつちようさほうこくしょ							
書名	県道久留米立花線道路改良工事事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第97集							
編著者名	大塚恵治							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町6-4-7							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
A・B地区 にしのまえ 西ノ前遺跡 しもまちぐち 下町口遺跡 つるみやま 鶴見山遺跡	ふくおかけんやめしとよぶく 福岡県八女市豊福	402109		33° 13′ 48″ 33° 13′ 51″ 33° 14′ 2″ 33° 13′ 57″	130° 34′ 27″ 130° 34′ 26″ 130° 34′ 23″ 130° 34′ 24″	2012. 2. 8～2012. 3. 11 2012. 6. 3～2012. 7. 7 2012. 7. 6～2012. 9. 2 2012. 8. 26～2012. 12. 16	238㎡ 545㎡ 220㎡ 280㎡	道路幅拡張
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
A・B地区 西ノ前遺跡 下町口遺跡 鶴見山遺跡	自然地形 集落 集落	鎌倉時代 鎌倉時代 弥生時代	谷状地形 井戸状遺構 谷状地形	瓦器、白磁 瓦器、白磁 弥生式土器				
要約	豊福遺跡群周辺は主に弥生・古墳時代を中心とした遺構群と鎌倉時代以降の遺構群が比較的多く検出されるが、今回の調査においても同様の結果であった。ただし、検出された遺構は単発的で、また、後世に予想以上の削平が行われており、全容を把握する事は本調査では出来なかった。しかしながら、中世・南北朝時代に該当する遺物が遺構中から出土した事は、同時代当地に人の営みがあった事を示す貴重な発見であった。							

県道久留米立花線
道路改良工事事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第97集

平成25年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1